

デカルトは心身問題を解決したのか？

Did Descartes solve the mind-body problem ?

久保田 進一

はじめに

哲学の問題で未だに解決されていない問題が幾つかある。そのうちの一つとして、心身問題がある。心と身体はどのような関係になっているのか、ということが心身問題であれば、この問題は古来からの問題であるが、デカルトの二元論によってその問題は顕著になった。というのも、デカルトは心と身体という二つの実体を認め、それらが区別でき独立していることを主張するからである。しかし、日常的には我々は心と身体が密接に関係していることを知るのである。例えば、腕を上げたいと思えば、腕を上げることもできるし、腕に針を刺せば痛みが生じるのである。もしデカルトの二元論をそのまま受け取るのであれば、腕を上げようと思っても腕を上げることもできないし、針で刺しても痛みを感じないことになる。しかし、そのようなことは、普通の日常生活では考えられないことである。我々は腕を上げようと思えば、腕を上げることができるのであり、針で身体のどこかを刺せば痛みが生じるのである。もちろん、デカルトも日常生活を無視した二元論を主張しているとは思えない。

デカルトの二元論がどのようなものであるかを考察することは重要である。しかし、その二元論から生じる心身問題について考察することは、哲学の抱える問題に取り組むことでもある。というのも、現代においても心身問題は解決されているとは言いがたいからである。少なくとも哲学者を刺激する問題であることは間違いない。それでは、デカルトは心身問題に対して、どのように取り組んだのであろうか。そこで、本稿においては、デカルトは心身問題を解決したのかどうかを検討していきたい。そのために、デカルトがどのような仕方での解決を試みたのかを見ていきたいと思う⁽¹⁾。

しかし、単にデカルトの解決を追随していくのではなく、デカルトの解決の

仕方が妥当であるかを検討していきたい。というのも、デカルトの解決は当面の心身問題は解決できるかもしれないが、新たな心身問題を生じさせているからであり、そのことを本論で示したいと思う。つまり、一口に心身問題と言っても、問題となる側面は異なるのであり、様々なヴァリエーションがある。デカルトの場合、ある心身問題を解決したとしても別の形で問題は新たに生じるのである。新たに別の問題が生じるのであれば、心身問題は解決されてはいないであろう。単に、当面の問題に対して、答えただけであって、心身問題それ自体には答を回避したということになる。他に問題が出てこないと言うのが、本当の解決の仕方であろう。従って、デカルトにおいては当初の心身問題は解決しているように思えるが、別の形で心身問題が生じることになる。そうすると、結局、デカルトは心身問題については解決していないことになるのではないだろうか。以上のことを踏まえて、デカルトが心身問題を解決しているのかどうかを検討していこう。

1. デカルト哲学の問題

1.1 第一の心身問題

デカルトの二元論によって、引き起こされた心身問題は、『省察』を書いた当初から、ガッサンディからの批判があったが、デカルトは一貫して『省察』の立場を言うだけであった。デカルトに心身問題を考えさせるきっかけを与えることになったのは、エリザベトの指摘であった。エリザベトの指摘は次のようなものである。

「(思惟実体にほかならない)人間の精神は、いかにして身体の精気が意志的に運動するよう決定することができるのか、どうかお教え下さい。というのも運動はすべて、動かされたものから押されることによって決定されますが、それは、それを動かすものからどのように押されるか、あるいは動かすものの表面の性質や形がどうなっているかによって決定されると思われるからです。」⁽²⁾

これは、精神がいかにして物体(身体)を動かすことができるのか、という指摘であるが、内実はこのようなものである。デカルトの二元論によると、精

神と身体は独立して分離している。しかし、日常の我々の経験からしたら、精神と身体は密接に関わり合っている。分離しているはずの精神と身体が、日常的には大に関わり合っているが、このことは一体どういうことなのか、ということである。

このエリザベトの疑問はもっともな疑問である。物体が物体を動かすということは、デカルトの自然学においても明らかなことであり、力学的な運動法則および衝突の法則によって説明されることである⁽³⁾。物体は自然法則によって支配されていることは、デカルトにおいても当然のことなのである。そこには、精神の働きは、一切介入してこないのである。一方、精神についても、物体の働き及び物体の存在は一切介入してこない。それは、デカルトが Cogito を導き出すために行った一連の方法的懐疑によって示される。身体（物体）の存在を疑っても疑っている「私」の存在は疑うことはできないのだから、疑っている「私」の存在は身体（物体）とは独立に存在し、全く別の実体であることが示されたのである。これらのことによって、デカルトにおいては二元論、すなわち「心身の実在的区別」が主張されるのである。しかし、エリザベトが疑問に思うように、もし心身が独立しているのなら、我々が日常的に経験していることは、本来起り得ないことであるから、奇跡の連続になってしまう。まさに、この精神と身体の関係は一体どういうことなのであるのか、疑問に思うのも当然のことなのである。

この精神と身体の問題についての問題を心身問題①としよう。確かに、デカルトはこの指摘によって、改めて心身問題を考えるようになったと言えよう。しかし、当のデカルト自身は心身問題を深刻には受けとめはしていなかった。むしろ、エリザベトが気づいた問題に、デカルト自身はその問題に気づかせてくれたことに感謝はしながらも、自分の中では矛盾するものではないと思っていたのである。それは、デカルトのエリザベトに対する答を見ると分かるであろう。

2. デカルトの解決策

2.1 エリザベト宛の書簡

では、デカルトの心身問題①に対して、エリザベトにどのように答えているのであろうか。デカルトの答は次のようなものである。

「殿下が提出された問題は、私が公にした書物の結果として私に出される最も理にかなったものと私には思われます、と間違いなく言うことができます。というのは、人間精神には二つのものがある、われわれが精神の本性について持つことができるすべての認識がこの二つに依存しています。その一つは、精神が思惟することであり、他の一つは、精神は身体に合一しているがゆえに身体とはたつき合うことです。私は後者についてはほとんど何も言っておらず、もっぱら前者をよく理解してもらうよう努めました。なぜなら、私の主な意図は心身の区別を証明することにあつたからです。そのためには、前者だけが役に立つことができ、後者は有害であつたでしょうから。」⁽⁴⁾

デカルトの答は心身分離を認めながらも心身合一を認めるというものである。普通考えると、このことは矛盾しているように思える。しかし、デカルトは矛盾しているとはこの段階では考えていないのである⁽⁵⁾。そもそも『省察』においては、「精神が思惟すること」を言うために、心身分離を言うことに努めたとしている。むしろ、心身合一を言うには有害であるために、あえて言わなかったとしているのである。すなわち、デカルトは『省察』においては、形而上学を確立するために心身分離の次元で語っている。デカルトは心身問題は心身分離と心身合一の次元に区別すれば問題は生じないと思つたのである。これによって、デカルトは心身問題①は解決していると考えたのである。

そして、エリザベトの指摘によって、改めて心身合一について、デカルトは考えるのであり、その成果が『情念論』である。もちろん、現代の脳研究の成果から見たら、デカルトの説明は到底受け入れられるものではないが、その試みは精神と身体がどのように関わるのかを生理学的に、機械論的に説明したものであり、その方向性は間違っていたわけではない、と言えるだろう。

そして、更にデカルトは次のように言う。

「まず第一に、われわれのうちにはある種の原初的な概念があります。それがいわば原型になり、それを型としてわれわれはすべての他の認識を形成していると考えます。そうした概念はきわめてわずかしかなりません。というのは、存在、数、持続など、われわれが理解することのできるものすべてに適合する、最も一般的な概念がまずあります。それに

次いで、個々の身体についてわれわれは延長の概念を持つのみです。そこから形や運動の概念が出てきます。精神だけについては、われわれが持っている概念は思惟のみです。思惟のうちには、知性の認識や意志の傾向が含まれています。最後に、精神と身体とを合わせたものについては、合一の概念しかわれわれは持ちません。この概念に、精神が身体を動かし、身体が精神に作用する力の概念が依存しています。それが感情や情念の原因になるのです」⁽⁶⁾

つまり、原初的な概念として延長・思惟・心身の合一を捉えるということである⁽⁷⁾。そして、心身の合一の概念において、精神が身体を動かし、身体が精神に作用して感情や情念を引き起こす力の概念が依存している、と言うのである。したがって、デカルトの心身問題①に対する回答は心身合一によって説明されるのである。

2.2 『哲学原理』第1部48節

また、エリザベト宛の書簡以外⁽⁸⁾でも、デカルトが心身分離と心身合一について述べている箇所がある。それが、『哲学原理』第1部48節である。

「しかし私は、事物の最高類としては次の二つだけしか認めない。一つは知性的事物すなわち思惟的事物の類、いいかえると、精神すなわち思惟する実体に属する事物の類である。他は、物質的事物の類、いいかえると、延長をもつ実体すなわち物体に属する事物の類である。認知、意欲、そして認知と意欲とのもろもろの様態のすべてが、思惟する実体に帰せられる。これに対して、延長をもつ実体に帰せられるものは、大きさ、すなわち長さ、幅、深さにおける延長、形、運動、位置、諸部分の可分性などである。しかし、なおそのほかにわれわれは、単に精神だけでも、また単に物体だけでも帰せてはならないところのある種のもの、をわれわれのうちに経験するが、これらは、のちに適当な場所で示されるように、われわれの精神と物体との密接な内的な合一に由来するものである。」⁽⁹⁾

ここでも見られるように、デカルトは心身分離と心身合一を区別しており、精神と身体との相互作用は、心身合一によって、説明されるとするのである。基

本的には、前の書簡で言われていたことと同じである。結局、精神と物体と合一を事物として認めると言うことである。また、合一に関しては「経験」によって理解されると考えるのである。まさに、「経験」ということは日常によって理解されることなのである。そして、それは人間というものが精神と身体の結合であるが故に、感覚を通して合一であることは理解されるのであって、すなわち相互に作用しあっていることを理解することなのである。

2.3 相互作用説

デカルトは心身問題・に対して、心身分離と心身合一の次元に区別することによって、解決したと考えられる。つまり、それは心身分離は形而上学的次元であり、心身合一は日常生活の次元であるとするのである。日常生活の次元において、心身は合一している存在であるから、精神と身体は相互に作用しているということである。このことに関しては、『情念論』によって説明がなされている⁽¹⁰⁾。まず、デカルトは『情念論』で能動と受動について述べている。それは、新たに起こることを受け入れる主体に関しては「受動」といい、そのことを起こす主体に関しては「能動」と呼ぶということである。能動者と受動者は多くの場合異なっているが、能動と受動はいつも同一のことを指すとする。つまり、生じている出来事は一つの事柄であるが、異なる主体に関係づけられるために、能動と受動と言われるのである。

次に、デカルトは精神の機能を二つに区別する。すなわち、「精神の能動」と「精神の受動」である。「精神の能動」とは、意志の働きの全てであり、さらに、この意志の働きを二種類に分けるのである。それは、「精神そのものうちに終結する活動」と「身体において終結する活動」である。デカルトが例に出しているのは、前者が「われわれが神を愛しようとする場合」⁽¹¹⁾であるとしている。後者においては、「われわれが散歩しようとする意志をもつということのみから、脚が動き、歩くということが生ずる場合」⁽¹²⁾としている。

一方、「精神の受動」とは、「通常、身体においては能動であること」と言い、受動とは情念のことでもある。それは、身体において能動的に作用したものが、精神には受動的に作用されるのである。デカルトは、一般的には次のように、定義できるとしている。精神の情念とは「精神の知覚または感覚または感動であって、特に精神自身に関係づけられ、かつ精気のある運動によって引き起こされ維持され強められるところのもの」⁽¹³⁾としているのである。

このように見てみると、デカルトは心身問題に対して、一つの解決の方法を

考えていたことがわかる。精神と身体がどのように関係づけているかを説明するのに、相互作用説の立場であることがわかる。そして、それは『情念論』において、精神と身体の生理学的かつ機械論的な説明を試みている。もちろん、その説明の仕方は、今日では誤った説明の仕方ではあるが、一応は松果腺を通して、筋肉や神経の働きを説明している。

ここで、注意することがある。ここでの話は精神と身体がどのように作用しているかということが問題になっているが、詳しく見ると、精神と身体のそれぞれの能動と受動という働きによって区分けされていることがわかる。単に精神と身体の相互作用を問題にしているのではなく、それぞれの機能、すなわち能動と受動の関係で精神と身体の相互作用を問題とするのである。上述のことを、能動と受動を使って精神と身体の働きを整理してみると、次のようになる。

能動 受動

- (a)精神-能動→精神-受動（精神内部の能動—受動）
- (b)精神-能動→身体-受動（精神と身体間の能動—受動）
- (c)身体-能動→精神-受動（身体と精神間の能動—受動）
- (d)身体-能動→身体-受動（身体内部の能動—受動）⁽¹⁴⁾

ちなみに、(d)はどういうことを述べているのかというと、「我々の意志があずかることなしに我々のなすあらゆる運動は我々の身体の構造と動物精気の流れ方とにのみ依存する」⁽¹⁵⁾ という場合である。例えば、意志することなしに呼吸をしたり、歩いたり、食べたりする場合をデカルトは考えている。それはちょうど、時計の運動がゼンマイの力と多くの歯車の形によって、生じる場合であり、まさに機械としての身体を考えているのである。そして、ある意味では(a)と同じ関係である。(a)と(d)はそれぞれ精神と身体の中で完結しているのであるから、心身問題には全くならない。つまり、(a)は精神の領域での話であり、(d)は身体あるいは物体の領域での話となる。ただし、『情念論』によって、説明される受動としての精神は、感情や情念のことである。それ故に、『情念論』は情念を扱うものである。一方、能動としての精神はすべて意志である。この意志によって、受動されるものが、どのように働きその結果として起こった出来事が善であるのか悪であるのかは、行為論あるいは道徳の領域の話になる。しかし、(b)は精神の能動ではあるが、身体に受動として働きかけるものであり、心身問題が生じる場面である。

したがって、心身問題が問題となるのは、(b)精神-能動→身体-受動と(c)身体-能動→精神-受動の場合である。そもそも心身問題の発端は、精神と身体は異なる実体なのに、何故、作用することができるのかというエリザベトの最初の質問だった。デカルトは(b)と(c)を説明することによって、心身問題に対する精神と身体がどのように関係しているのかという説明は一応の解決案として提出されるのである。

それは、次のような説明の仕方である。脳の中心に空室があり、その内側の壁には身体各部分からの神経管が開いている。そして、この脳室と神経管には心臓から熱せられ、希薄化された微細な粒子である動物精気が絶えず活発に動いている。また、脳室の中心には松果腺がぶら下がっており、外部にある対象が与える印象は感覚器官から神経に伝わり、さらに脳室の内壁に再現され、それが動物精気を介して松果腺に伝えられるのである。また、この松果腺が動かされると、動物精気が別の方向に動かされ、ある運動神経管の方に入り、これが今度は筋肉を動かし、身体運動を起こさせるのである、と説明する。そして、この松果腺が精神の座であるとする。デカルトはこのような説明によって、心身合一は説明されたと考えるのである。確かに、この説明は問題はあるが、その方向性は現代にまで続いている。

しかし、デカルトの解決案としての心身の相互作用説では心身問題は解決されていると言えるであろうか。デカルトは心身問題を心身合一の説明で解決できていると考えていたようであるが、この解決は心身問題の解決と言うよりも心身問題を問題にしなかったことのように思える。むしろ、エリザベトの質問には直接答えているが、その後が生じるであろうと考えられる問題までは、この段階では考えておらず、当面の問題に対してはうまく応え、回避したように思えるのである。

それでも、デカルトとしては心身合一のあり方を詳しく説明したのだと思う。というのも、どのようにして精神と身体が作用しあっているのかという説明は、能動と受動によって説明されており、生理学的に説明されているからである。しかし、果たしてこれで、心身問題の本当の解決だと言えるのであろうか。

3. 新たな問題

3.1 新たな心身問題

デカルトはエリザベトが問題とした心身問題①に心身分離と心身合一の次元で考えれば、問題は生じないとした。すなわち、形而上学的次元においては純粋知性を使い、心身分離を理解すること重視する。一方、日常生活においては心身は合一しており相互に作用していることは、感覚によって明晰に理解されることなのである。したがって、心身分離と心身合一は次元の違いであるから、この次元を区別することこそが重要であるとする。

しかし、ここで新たな問題が生じるのではないだろうか。つまり、それはデカルトは一方で心身分離を認めながら、他方では心身合一の立場を取っているというのは、デカルトの哲学体系において、矛盾にはならないだろうかという疑問が生じる。デカルト哲学を一つの体系としてみるのなら、どうして異なる立場が並存していられるのであろうか。そこに、また新たな問題が生じるのではないだろうか。つまり、次元の違いで心身分離と心身合一を区別し、心身合一によって心身の相互作用を説明したとしても、心身問題①は解決されるが、何故、区別が必要なのか、区別しなければならない理由は何なのかという問題が出てくる。つまり、心身分離の次元と心身合一の次元の関係はどのような関係になっているのかという問題が生じてくるのである。これは形を変えた心身問題である。これを心身問題②としよう。

ここで付け加えておくと、この心身問題②はデカルト自身も考えていた問題とも言える。次の箇所がそのことを示している。

「殿下が心身の合一についてわれわれが持っている概念が曖昧だと考えられたのは、あまり注意を要しない思考よりも、むしろこうした省察のせいであると、私は判断しております。というのも、精神と身体との区別とその合一とを、きわめて判明にかつ同時に理解することは、人間精神にはできないと思われるからです。けだしそのためには、心身をただ一つのものとして理解すると同時に、二つのものと理解しなければなりません、それは矛盾するからです。この件について（これは殿下が、精神と身体との区別を証明する論拠を今も精神に現前するものとしてお持ちである、と仮定した上でのことです。また、各人が哲学することなしにいつも自分自身において経験している合一の概念、つまり、身体と同時に思惟を持ち、思惟が身体を動かし、身体に起こる出来事を感じることができるよう、ただ一人の人間を思い描いていただくために、殿下がその論拠をお捨てになるようお願いするつもりはありません）、私は先に

重さや、たとえば思惟がわれわれの身体に合一しているように、ある物体に合一していると一般に考えられている他の性質のたとえを使いました」⁽¹⁶⁾

デカルトがここで問題としているのは、心身分離と心身合一をどのように同時に理解すべきなのかということである。元々の心身問題はエリザベトが精神と身体はどのように作用しているかということであった。これは、心身問題①である。しかし、この書簡では、心身合一と心身分離をどのように理解することが良いのかが考察されているのである。これは、先に示したように心身問題②とすることになる。つまり、デカルトはエリザベトの心身問題から自らの心身問題を考えるようになったと言えるだろう。もちろん、エリザベト自身もデカルトに再三の質問をしていることを考えれば、ここまで考えていたのかもしれないのである。

デカルトはこの問題については、上で見たように気づいていたのであるが、納得のいく説明を与えることはできなかったように思われる。ただ、デカルトはあくまでも異なる次元であることを主張し、区別することを説いている。それは、心身分離と心身合一の次元の区別であり、すなわち、形而上学的次元と日常的次元を区別することによって、心身問題は問題とはならないし、真理を認識する場面と実生活を営む場面も確保されると考えているのである。それは、ちょうど心身分離の場面は『省察』の次元であり、心身合一の場面は『情念論』の次元であると考えているとも言えよう。また、心身分離は知性によって捉えられるが、心身合一は感覚によって捉えられる次元とも考えられるのである。

つまり、心身問題①に対して答えたデカルトの回答は、心身問題①は解決されるのであろうが、心身問題②が生じる。心身問題①はエリザベトの問題であるが、心身問題②はデカルト自身の心身問題と考えられる。したがって、心身問題①が心と身体の関係の問題であり、このことを解決するために、心身分離と心身合一の立場をデカルトは提示した。そうすると、今度はこの心身分離と心身合一の関係が問題となってくるのであり、これが心身問題②ということになる。これについてはデカルトはただよく区別することが重要であると言うが、その区別することの根拠を述べていないのである。心身問題②は、結局、この区別はどのような根拠に基づいているかということまで及ぶ問題である。デカルトの言う次元が異なるとか場面が違うというのは、一体どういうことなのであろうか。

3.2 新たな問題の解決案

デカルト自身、心身問題②には答えていないが、もし答えることができるとしたら、どのようにこの問題には答えたらいいのであろうか。そのことについて、考えてみよう。心身問題②は心身分離と心身合一をどのように並存させるかという問題である。デカルトはこれに対し、次元の違いを言うが、デカルト自身、次元に分ける根拠を述べていない。

しかし、区別するというを次元の区別として考えると、一体何が区別されるのか。デカルトは形而上学的次元と実生活の次元に区別する。しかし、そうなる形而上学的次元における精神と身体は、実生活における精神と身体と異なることになるのであろうか。異なると考えるなら、その異なり方は心身分離と心身の合一の違いである。しかし、分離と合一は確かに異なっている。しかし、ここで分離と合一が次元の区別の根拠であることは言うことができない。というのも、もともと形而上学的次元と実生活の次元に区別したのは、この分離と合一の違いなのである。つまり、ここで心身分離と心身合一を次元の区別の根拠に使っては、論点先取になってしまうからである。したがって、このことは根拠に使えないのである。

それでは、他の点を見てみよう。分離と合一が根拠に使えないとしたら、それぞれの精神と身体が異なっていると考えることができる。つまり、心身分離で言われる精神と身体と心身合一の時に言われる精神と身体は実質的に異なるものと言うことである。確かに、このように考えれば、それこそ区別の根拠になる。しかし、たとえ実質が異なっているとしても、今度は同じ精神と身体という語を使っている以上、何らかの点で共通であることも示さなくてはいけなくなる。全く実質が異なっているとしたら、精神や身体と言う言葉は、わざわざ使う必要がなくなってしまうのであり、言葉の意味を無視することになってしまう。そうすると、心身分離と心身合一という言葉は、一体何を意味するのであろうか。つまり、言語表現が同じであれば、実質がたとえ異なっていようが、何らかの意味が同じでなければならない。逆に言えば、実質が異なるほど異なっているとしたら、同じ言語表現を使ってはいけないことになる。しかし、もし実質が異なっているとしたら、精神と身体の実質が異なるとは思えない。心身分離

デカルトは、少なくとも精神は思惟するものであり、身体（物体）は延長するものであると考えていた以上、実質が異なるとは思えない。心身分離

にしても心身合一にしても、精神は思惟するものであり、身体（物体）は延長するものであることには変わらないのである。そもそもデカルトにあっては、精神と身体において、これ以上の定義があるだろうか。つまり、心身分離と心身合一と言われるときの精神と身体においては、実質は異なっていないということになる。しかし、そうなるとこの区別の根拠はどこに見いだすべきなのであろうか。それは、心身問題だけの問題ではなく、デカルト哲学全体の問題と言えよう。というのも、心身分離と心身合一がデカルトの哲学の全体系においては、矛盾なく納まっていると、少なくともデカルト自身は考えていたからである⁽¹⁷⁾。

むすび

これまで見てきたように、デカルトが心身問題に対してどのような解決を考えたのかというと、心身分離とは他に心身合一という次元を提示し、両者の次元を区別することによってであった。この解決の仕方は、最初のエリザベトが問題とした心身問題①には答えているのかもしれない。しかし、その後で生じてくるデカルト自身が考えている心身問題②に関しては、デカルトは解決しているとは思えないのである。ただ、次元の区別が必要であることを言うのみである。もちろん、エリザベトもデカルトの回答に満足しているわけではなかった。だから、あれほど執拗にデカルトに再三疑問を提示しているのである。

しかし、更に言えば、デカルトが主張する次元の区別の根拠は何なのであろうか。これについては、デカルトは直接的には全く答えていないのである。デカルトにとっては、この区別をすることはわざわざ説明を要しないほど自明なものだったのであろう。

このように、見てみるとデカルトは心身問題は自分の哲学体系の中では、それほど問題があるとは考えていなかったように思える。つまり、デカルトにとっては、心身の相互作用ということは、心身合一の次元で処理される問題であり、むしろ心身分離と心身合一をどのように考えたらよいのかという別の形の心身問題②の方が重要だったと言える。普通に考えれば、デカルト自身が「矛盾する」と言うように、デカルトの関心事はこの矛盾をどのように避けるべきかが心身問題の関心ある問題だったのである。しかし、それも次元の区別を主張するのみでその根拠が示されていない。結局、デカルトは

心身問題②については、答を提示しないままである。というよりも、心身問題をそれほど深刻には問題にしなかったと考えられるのである。この理由については、心身問題だけを問題にしても分からないであろう。デカルトの哲学体系あるいは学問観を全体として見なくては理解されないのではなかろうか⁽¹⁸⁾。

註

- (1) デカルト以外の哲学者の解決の仕方を見ると、スピノザは神だけを実体とする一元論から精神と身体は神の様態であり、両者はバラレルに關係しているという心身平行論を挙げた。ライプニッツは、神が心身二元の間にあらかじめ交互作用が成立するように調和させておいたという神の予定調和による解決を提出した。その他にゲーリンクスの機会原因説などがある。近年ではスマートやファイグルの同一説、パトナムの機能主義やそれに続く様々な種類の機能主義（素朴心理学的機能主義・目的論的機能主義）が挙げられている。また、デイヴィッドソンの非法則論的一元論や坂本百大の原一元論もあり、様々な試みがなされている。
- (2) デカルトからの引用はすべてアダン・タヌリ版全集によるものとする。*OEuvres de Descartes*, publiées par Charles Adam et Paul Tannery, Paris J.Vrin 1964-1975 これをA T. と略記し、その巻と頁をそれぞれローマ数字、アラビア数字で示す。Elisabeth à Descartes, 6/16 mai 1643, AT. III, p.660.
- (3) 物質の各粒子の運動については、『世界論』第7章(AT. XI, pp.36-48.)において説明がされている。
- (4) Descartes à Elisabeth, 21 mai 1643, AT. III, pp.664-665.
- (5) 山田弘明 『デカルト『省察』の研究』 創文社 1994年 407-408頁。山田は心身の区別と合一に関して、『省察』のテキストにおいては不整合であることを挙げているし、『省察』の段階では区別と合一をデカルト自身、矛盾しているとは思っていなかったとしている。
- (6) Descartes à Elisabeth, 21 mai 1643, *op.cit.*, pp.664-665.
- (7) コッティンガムはこの原初的概念(*notion primitive*)を基にして三元論

- (Trialism) を主張する。John Cottingham, *Descartes*, BLACKWELL, 1986, pp.127-132.
- (8) デカルトの主な著作として、『省察』が当然挙げられるが、デカルト自身述べているように、『省察』では心身分離の立場から述べているので、心身合一に関しては、基本的には述べられていない。ただ、『省察』のなかでも強いて挙げれば「第六省察」の箇所が挙げられるが、この箇所は問題のあるところでもある。山田も「第六省察」については問題点を挙げている。(山田弘明 「『第六省察』をどう読むか」 所収『哲学』 No.45 法政大学出版局 1995年 73-86頁。)
- (9) AT. VIII, p.23.
- (10) 『情念論』の第一部で、その説明はなされている。AT. XI, pp.327-370.
- (11) AT. XI, p.343.
- (12) *ibid*.
- (13) AT. XI, p.349.
- (14) 整理の順番は異なるが、精神と身体の能動・受動について同じように美頭によって整理されている。(美頭千不美 「デカルトと心身問題」 所収『デカルト読本』 法政大学出版局 1998年 131頁。)
- (15) AT. XI, pp.341-342.
- (16) Descartes à Elisabeth, 28 juin 1643, AT. III, pp.693-694.
- (17) この点については、『哲学原理』「仏訳序文」(AT. IX-2, p.14)に見られる「哲学の木」が手がかりになるように思われる。
- (18) この点については、また明らかにしなくては行けないが、本稿においては、デカルトが心身問題を解決したのかしないのかを検討することが目的であった。当初の目的は、果たされたと思われる。

※本稿は 1999年 11月 14日に法政大学に於いて行われた日本科学哲学会第 32 回大会の研究発表「デカルトは何故、心身問題を問題としなかったのか？」の原稿の一部をもとに加筆・修正したものである。